

宇治 暗闇の祭り (一)

私説——宇治稚郎子 あるいは悲劇の一族

梅 山 秀 幸

——かく宇治の宮の族の、命の短かりけることをこそ……

(『源氏物語』蜻蛉)

六月六日未明、宇治。玉露を作るための覆^{おいした}下園での茶の新芽摘みの作業がひと段落ついて、街全体が燻ったようになってしまう梅雨にはまだ間のあるころ、馥郁とただよう新茶の香りに包まれて、宇治はいくつかの祭りの舞台となる。その祭りの一つ、奇祭として名高い県祭りの核心をなす部分がいま執り行われようとしている。一帯は深い闇に包まれている。古来のしきたりで、その刻限、街の灯りはすべて消されることになっている。酒気を帯びて道中で荒れ、神輿を揺さぶり、叩き落とし、独楽のように回したりしながら、宇治橋三の間、すなわち半ばまでせり出して行った講社の人びとも、いま県の社の樹の下で、その敵かな一瞬を待って神妙である。前方に眼を凝らすと、闇の中を白い装束の神官が這うようにして、御霊屋への階段を昇って行くのがおぼろげに見える。そうして、人びとが息を飲む中、御霊屋の扉が荒々しく音を立てて開け放たれる。どよめきが起り、そして、それは波のように引いた。ふたたび静けさの中を幽けく、しかし強く、唸るような声が聳る。神の出御を先導する神官の警蹕^{けいひつ}の声か、いや一年の眠りから醒め、いましめから解き放たれた神そのものが発する声か、神は階段を小刻みに走るように、あるいは一陣の風のように降りて来て、神輿に憑依する。生命を吹き込まれ、神そのものとなった神輿は、くるくると二三度回る。神輿、そ

れは正確には梵天で、奉書紙を多数重ねて葱坊主の形をしている、芝居小屋の檜に立つものと同じである。

暗闇の宇治神明をお旅所の方へと神は向う。宵方まで障子を開け放し、老若男女混じり合って酒を飲み、歌い、そして踊る姿が格子越しに見えていた沿道の家は——かつてこの祭りがオルジミックなものだったという風評がある——、いまはすっかり締め切って、ひっそりとしている。寝静まっているというのは、表現が適切ではないだろう。外に決して灯りを洩らさないよう気遣いながら、静かに息をひそめ、敬虔に神の渡御を待ち過ごす、物忌みの静けさと考えるべきであろう。不思議なことに、この祭りの執行に地元の人びとは関与しない。県神社は宇治には氏子を持たず、宇治川の下流、大阪の人びとが講社を組んでやって来て祭りに奉仕するのである。この奇妙な仕組みについて、後に一つの仮説を立てることにしよう。静かな神の行列は小一時間かかって宇治神社のお旅所に到着し、梵天はお旅所の建物の中に放り込まれる。扉を閉じたお旅所の中での数分間、いったい何事が行われたというのか。実は、奉書紙は引きちぎられ、梵天は無惨にも乱暴に解体されているのである。神が殺戮される。神＝王は年ごとに殺されるために選ばれ、その死の代償として、あらゆる生命の更新と豊饒が保証されるのだと、フレイザーはその著『金枝篇』の中で説いた。悠遠の昔のエジプトの神オシリスがセトによって四肢をばらばらにされるように、梵天はばらばらにされる。そうして、その残骸は先を争って人びとが持ち帰り、家いへの護符となる。あるいはそれに火を点けて煮炊きをすれば、健康が約束されることになる。……

宇治という所

わが庵は都のたつみしかぞ棲む世をうち山と人は言ふなり（『古今集』卷

18・983）

喜撰はこの歌一首しか残さなかったにもかかわらず、六歌仙の中に数えられ、文学史の中に名を止めるという稀有の僥倖に与かった歌人である。そしてまた、この歌一首によって、平安朝の人びとにとって宇治は「憂し」の霧田気に覆われ、濁り切った京都の生活に倦み疲れた人びとの隠棲地といった趣を持つ場所となる。確かに厭離穢土の浄土教の思想を背景に、「人が言うように、世を憂しと置いて宇治山に住んでいる」という解釈が自然なのであろうが、「人は世を憂しと置いているが、自分はまあ気楽に宇治山に住んでいる」というように、月次みな厭世観を一步突き抜けたところで解釈する方が、この歌の味わいは深くなる。昨年の京都の顔見世で、板東襄助改め九代目三津五郎は『六歌仙容彩(ろっかせんすがたのいろどり)』の中の、宇治山を抜け出して祇園に足繁く通う喜仙を洒脱に演じていた。この江戸時代の感性、嗅覚は、あざといけれど、するどい。

喜撰の歌に歌い込まれているように宇治は宇治山であった。本来的な宇治は宇治川右岸の方なのだが、そこはすぐさま、高く険しいというわけではないけれども、丘陵といってよい地形になっている。そこで、宇治の語源はウナ(畝)-チ(地)であり、una-ti が約まって u^odzi になったという吉田金彦氏の説が、従来の宇治=内説よりも説得力を持つものとなる。ウナは田の畝、うなじなど、高くなっているところを示し、大和の畝傍山の語源も同じだというわけである(「日本語語源研究会」1982年11月発表レジュームによる)。源氏物語において、宇治はやはりあくまで山里として語られている。

しかし、宇治といえは、われわれは中央を激しい勢いで流れて行く川、そしてそのほとりの平等院をまず思い浮かべる。垂直と水平の直線と、そしてゆるやかに反った屋根の曲線が絡み合いながらも、その交錯がすっきりと整理され、まさに左右に羽根を広げた鳳凰のような形の阿弥陀堂が池の水面に映える。そのお堂の中には柔和でありながらも、どこか官能的でさえある定朝の阿弥陀如来が鎮座し、その周囲を気高い印象を与える飛天たちが音楽を奏でながら飛び交っている。静謐さのなかに浄土の至高の旋律が流れるよう

で、王朝の貴族たちの彼岸への真摯な憧れがわれわれに伝わって来る。あるいはまた、源氏物語の最後半は宇治を舞台にしている、息づまるような男女の心理の葛藤を描いて、「愛のペシミズム」を徹底させながらも、みやびへのわれわれの思いをかき立てる。宇治という京都の郊外の土地の名からわれわれの想像力の空間に忍び込んで来るのは、癒し難いデカダンスに浸されながらも、そこからの永遠の救いを希求する、真摯な精神に裏打ちされた王朝の繊細な美の世界である。

そうしたイメージを心に抱きながら、実際に宇治を歩いてみると、しかし、さまざまな名所旧蹟に突き当たる。一昨年（1986）の秋、宇治市歴史資料館で「よみがえる古墳文化」と銘打って特別展が催された。宇治地域から出土した土器、人物埴輪、神獣鏡、そしてガラス玉など、おびただしい埋蔵文化財が古墳時代の宇治の活況を垣間見せてくれた。宇治は平安時代よりはるか以前からの長い歴史を持って現在に到っている。そして、そのさまざまな時代の古蹟が今でも残っているのである。拙い文章での紹介の手間を省くために、江戸時代に最も流布した京都案内書である『都名所図会』によって、「宇治里」の名所の項目だけを列挙してみよう。『都名所図会』はまず宇治の概観を記し、宇治十帖のそれぞれの巻のゆかりの場所を紹介し、そして次の二十余りの名所を挙げている。

宇治川一山吹瀬一橋小島崎一宇治橋一橋寺一離宮八幡宮一朝日山一朝日山
恵心院一仏徳山興聖寺一観流亭一亀石一中宿芝一槇島一橋姫のやしろ一浮
舟島一鶺鴒瀬一槇尾山一平等院一宇治別業一県の社一金色院白山権現

最後の金色院だけはさらに宇治川左岸を溯り、右へ折れて山を踏み分けて行かなくてはならず、少し離れているが、他は一キロ四方にも満たない土地にこれだけ数多くの名所が蝟集しているのである。これらの中のいくつかについて後で詳しく述べることになるだろう。ところがこうした名所を案内するに先立って、『都名所図会』は宇治里の梗概を記して、次のような一文を載せる。

「宇治里——あるひは兎道ともかけり。都より行程四里にして、宇治橋の東は宇治郡、西は久世郡也。むかし、応神天皇、第五の親王兎道稚郎子に帝位をゆづり給ふを、かたく辞して、ここに閑居し給ひ、宇治宮と号し、兄大鷦鷯皇子に譲り給ふ。是も又、父帝の勅なきを位に即べきやうなしと互ひに辞し給ひ、天子なき事三とせが間なり。遂に宇治宮みづから薨じ給ふに
よって、兄の親子^{〔マツ〕}即位し給ふ。これを仁徳天皇と申す也」(新修京都叢書第六卷『都名所図会』より。句読点は筆者)

われわれにとっては唐突かもしれないが、宇治といえば、まず宇治稚郎子(引用文以外はこの表記に統一したい)という古代日本の親王の事蹟を思い浮かべるのがかつては普通だったのである。平等院も橋寺も、橋姫神社も、説明はすべてその後回しになる。宇治稚郎子は現在まったくといってよいほど問題にされることのない存在である。しかし、古代史の中で彼ほどに重要な役割を果たした人物はそれほどいないように思われる。宇治は何よりもまずその宇治稚郎子の宮処であったと人びとには印象づけられていた。そのことをしっかりと認識して置かなくてはならない。

源氏物語の宇治

光源氏のさまざまな恋に彩られた一生が終り、その次の世代も恋の時代を終え、社会の重きをなすようになって、恋はまた次の若い世代の身と心とを苦しめることになる。そして、橋姫の巻で源氏物語の読者は初めて宇治に案内される。そこには政権争いに敗れて京の生活に倦み、仏道の修行に明け暮れる年老いた親王がいて、その美しい娘たちとともにひっそりと暮している。その若さにもかかわらず、何に対しても思いわずらうことのないはずの現在、そして宮廷での約束された華やかな将来にもかかわらず、仏教に傾倒し、宇治に住む親王の名声を慕って訪ねて来た貴公子がその娘たちへの不幸な恋に陥るといった筋立てが展開する。この物語の宇治の世界に入るに当

て、現在の源氏物語研究者たちの注釈書がどのような説明を加えているか振り返って置きたい。少しくどくなるかもしれないが、一つの仮説を提出する前に、現在一般に出回っている見解を是非確認して置きたいのである。

まず阿部秋生・秋山虔・今井源衛三氏のものでは、宇治の八の宮が宇治に移り住むところ、「宇治といふ所によしある山里持たまへりけるに」という文章に次のような注釈を加えている。

「平安時代は貴族たちの別荘地となり、また長谷寺参詣の経路にもなった。京都からは半日行程。『……といふ所』は、ここで初めて話題になる新たなる別世界の印象を与える表現。『わが庵は都の辰巳しかぞ住む世をうち山と人はいふなり』（古今・雑下 喜撰）以来「憂」の意をこめた歌枕となった。現世に絶望した八の宮を迎える場所としていかにもふさわしい。」（日本古典文学全集『源氏物語五』小学館）

石田穰二・清水好子両氏のもは、同じ箇所土地に対する地理学的なごく簡潔な注釈を施しているだけである。

「今の京都府宇治市。琵琶湖から出る宇治川が、山間部から平野に出る所。大和への交通の要路に当り、平安時代には、宇治川を挟んで貴族の別荘が営まれた。」（新潮日本古典集成『源氏物語六』）

池田亀鑑氏のもは、橋姫の巻の最初に語句への注釈とは別に、一言次のように付け加えている。

「〔附記〕古註に宇治八宮を菟道稚郎子の事に准へるが、宣長は惟喬親王に準據したものとしてゐる。」（日本古典全書『源氏物語五』朝日新聞社）

ここには宇治稚郎子についての言及があるわけだが、しかし必ずしも積極的な宇治稚郎子=宇治八の宮モデル論の肯定論というわけでもない。そうして最後に、山岸徳平氏のもは、橋姫の冒頭の「世にかずまへられ給はぬふる宮おはしけり」という一節に対して補注をやや詳しく付けて、やはり宇治稚郎子に言及している。

「この古宮は、桐壺帝の第八皇子である。故に、八宮と呼ばれた。源氏の

異母弟。源氏がもし存命するならば、この頃六十七歳。十宮冷泉院は四十九歳。故に、八宮は五十歳代であろうかと思う。

この八宮を、昔は、宇治の稚郎子命に擬したように述べていた。玉の小櫛には、八宮を惟喬親王に準抛し、薫を業平の面影ありとしているが、それらは単なる思いつきに過ぎない。故に問題にはならない。」(日本古典文学大系『源氏物語四』岩波書店)

山岸氏は宇治稚郎子に言及してはいるものの、宣長が否定しているのを踏まえてあっさりとその準抛説を否定し、ついでに宣長の惟喬親王=宇治八の宮説も簡単に退けているのである。しかし、これらの注釈で、かつて、宇治八の宮は宇治稚郎子をモデルにしたものであるという説が牢固としてあったことがわかる。それを否定してしまったのは本居宣長だったわけであるが、その部分を『玉の小櫛』から引いてみよう。やはり「ふる宮おはしけり」という箇所に対する注釈である。

「惟喬親王に准據して書るなるべし、冷泉院の御世になりて、世にはしたなめられ給へる事、似たることあり、又宇治に住み給ふは、かの親王の、小野の山里にこもり住給へりしに准へたるなるべし、薫君のとぶらひ参り給へるも、業平朝臣のおもかげあり、菟道ノ稚郎子の御事は、さらによしなし」(『本居宣長全集』第四卷、筑摩書房)

このわずか数行の注釈が古注以来の伝統を覆すことになるのだから、もう少し納得のいく、しっかりとした論拠を示して欲しかったと思うのだが、宣長はいともあっさり宇治稚郎子を葬り去ってしまった。漢籍心^{カラフミゴコロ}を極端に嫌った宣長がそれこそ日本で最初に漢籍を、文字を習って、神ながらの道の墮落の端緒を作った宇治稚郎子を嫌ったというのでもないのだろうけれども。

それでは、古注の伝統というのはいったいどういうものであったのだろうか。四辻善成の『河海抄』は、橋姫の巻の、北の方の死後、いよいよ仏教へと傾斜して行く八の宮の有様を述べる「経を片手に持給ひて、かつ読みつ

つ」という文章に対し、他に何等説明がないという意味ではいかにも唐突な注釈を付けている。

「応神天皇十五年^{甲辰}八月百濟遣阿直岐直岐能読經典即太子菟道稚郎子師焉天王問曰如勝汝博士亦有邪对曰有王仁者是秀也時遣荒田別於百濟徵王仁十六年^{乙巳}王仁来太子師之習諸ノ典籍

欽明天皇十三年百濟ヨリ献経論」(玉上琢彌編, 山本利達・石田穰二校訂『紫明抄・河海抄』)

(訓み下し、応神天皇十三年^{甲辰}八月、百濟阿直岐を遣はす。直岐能く經典を読む。即ち、太子菟道稚郎子の師とす。天王問ひて曰く、「もし汝に勝る博士亦有や」と。对へて曰く、「王仁といふ者有り。是秀れたり」と。時に荒田別を百濟に遣はし、王仁を徵す。

十六年^{乙巳}王仁来たり、太子之を師とし、諸の典籍を習ふ。

欽明天皇十三年百濟より経論を献る。)

この注釈は日本書紀に依拠して、単に皇位継承に関わり、宇治に住いた親王であるということだけでなく、外来思想を積極的に学んだという共通項を宇治稚郎子と八の宮の両者に指摘しているわけである。ただし、前者が学んだのは中国の典籍であり、八の宮の学んだインド生れの仏教の日本への東漸はずっと後代の欽明朝のことであると但し書きを付ける。この簡潔さが『河海抄』の態度なのであろうが、しかし、この簡単な注釈の奥行きは深く、実は宇治十帖の構成そのものにまで関って来るように思われる。『河海抄』を継承しつつ、一条兼良の『花鳥余情』は橋姫の巻の注釈に入る前に、つまり宇治十帖の総論に当たるといってよいと思われるが、宇治稚郎子の事蹟を詳細に述べて宇治八の宮と対照させる。長くなるが、たいへんに重要な箇所なので、省略せずに引用したい。

「抑応神天皇と申は宇佐宮八幡大菩薩におはします。其御子、このかみを大鷦鷯のみことと申、おとうとを菟道稚子と申けり。父みかど、うちのわか子をやことに愛子におはしましけん、東宮にたて奉らせ給ひてけり。そ

の後、みかどかくれおはしましにければ、東宮位につかせ給ふべきを、いかでわれこのかみををきたてまつりては位につかん、大ささぎのみこはやく位につかせ給へと申たまひけるを、われはこのかみなりとも、うぢわか子を先位にとおぼしめしければこそ、太子にはたてまつらせ給ひけめ、いかでかちの御心をばたがへたてまつらんとて、われは難波におはしましにけり。又うぢのわか子も宇治にこもり給ひにけり。そのほどに、国々のあまどもみつぎ物をもちて、うぢにもてまいれば、天皇にあらず、なにはへもてまいれとおほせられければ、難波へもてまいれば、又宇治へもてまいれとおほせければ、あちこちもてまいるほどに、なにもくち損じければ、あまどもものをが物から袖をなんぬらしける。かくて三年をへけるほどに、うぢわか子のたまはく、我このかみの王の心ざしをたがふべからず、ひさしくいきて天下をわづらはさんやとて、わぎとなるやうにてかくれ給ひにければ、大ささぎのみこ聞きたまひて、難波よりいそぎおはしまして、いかでわれをすててさきにはたち給ふべきぞ、いそぎかへり給へと、棺にむかひてかなしみ給ひければ、うぢのわか子いきかへり給ひて、おきゐ給て、申たまはく、これは天命なり、かぎりあることなり、いかでかとどまらんと申給て、又棺にふして、つゐにうせ給ひにければ、大ささぎのみこ、素服して、かなしび給て、宇治山のうへにみささぎなどし給ひて、そののちなん、大ささぎのみかど、つゐに位につき給ひにける。是を仁徳天皇と申也。宇治といふ名は山城の国の郡の名也。やがて里をもうぢといへり。是は昔よりの名なれば、神功皇后の御世の歌の詞にも、たな上すぎて、うぢにとしへつとよめり。この所にすみ給へるによりて、宇治わか子とは申侍る也。今昔、物語の宇治のうばそくの宮と申は、桐壺の御門の第八の宮なり。御母は左大臣の女と見えたり。その御おとうと冷泉院第十の御子也東宮にましましし時、朱雀院の母后、大ささぎと申侍る、ましましき。此后、わが御むまごの東宮を冷泉院にひきこされ給へるを、ほいなき事におぼしめして、せめてのはかり事に、この八宮をとりたて、もて

かしづき給へりけるを、六條院の御いきほひにをされ給て、其こともとけずなりて、それより六條院とも、此八宮御中そばそばしくならせ給てければ、中々より所なくて、年月を送り給へるに、京の御家さへやけにしかば、うちといふ所によしある山里の有けるにうつろひ給へければ、宇治のうばそくの宮とは名づけ侍るなり。昔のうぢわか子はこのかみに位をゆづりてうちにこもり給へり。此八宮は御おとうとに東宮をこされてうちにかくれ侍る事、ことなるやうなれど、そのほいをとげずして、世をうち山に名をのがれ侍る。そのあとあひにたるうへ、ともに兄弟の間のことなれば、かたがたに宇治の巻とは申つたへ侍る也。」(国文注釈全書第三卷『河海抄・花鳥余情』による。句読点および濁点は筆者が付した。)

一条兼良はたいへん明晰に、要領よく問題点をまとめてくれている。宇治稚郎子がどういう人だったか、特に皇位継承のエピソードに焦点を当てて述べ、同じく宇治八の宮の代替りの際のごたごたに触れる。どちらもが宇治に住み、皇位継承の問題は両者とも「兄弟の間のこと」であり、だからどちらもが「宇治の巻」だというのである。そう、源氏物語だけでなく、古事記・日本書紀にも「宇治の巻」、宇治の物語があって、それが源氏物語の宇治の物語に影を落としていることを一条兼良ははっきりと指摘しているのである。しかし、宣長の『玉の小櫛』の一言により、この説はまったく顧みられなくなってしまった。あるいは現在では、源氏物語は作者紫式部の稀有の想像力によって生れた虚構であって、実在の人物をモデルとして論ずることが、必ずしも物語の理解を深めることにはならないと意識されているのかもしれない。テキスト(作品)はテクスティル(織物)のようにその経(たていと)と緯(よこいと)のテクスチャー(構造)それ自体を分析すれば事足りるというわけである。確かに故実と物語という虚構の世界とを引き合わせるのは、野暮といえ、この上なく野暮な作業である。しかし、紫式部は有識故実をしっかりと踏まえ、また「日本紀などはかたそばぞかし」と言い切ってしまうほどに、「歴史」を知悉した上で、それと対立する姿勢を持

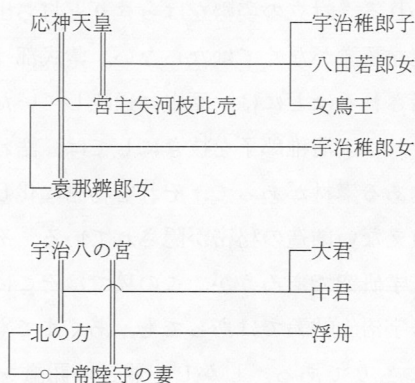
っていたように思われる。対立の姿勢をはっきりと打ち出すためには、相手に対する深く、正確な認識がなくてはならない。紫式部は事実どうやら「日本紀の局」とあだ名されるほどには、歴史に通暁していたのである。そうして、宇治の歴史、それは宇治稚郎子を抜きにしては、語れないものであったといってよい。無論ある素材があって、それを物語に化していく過程には、常人の検索の手に負えない創造の秘密が隠されている。それに一步でも近づこうというのが、文学研究であろうが、この稿ではそこには立ち入るまい。この稿は側面からの宇治十帖論ではあっても、あくまでも宇治稚郎子論として手をつけているつもりである。しかし、兼良の認識を踏まえ、宇治稚郎子=宇治八の宮準拠説を越えて、さらに一步先へ進むことも可能であるかもしれない。

宇治八の宮が女性の一族を持っていたように、宇治稚郎子もやはり女性の一族を持っているのである。

「又丸邇之比布禮能意富美の女、名は宮主矢河枝比賣を娶して、生みませる御子、宇遲能和紀郎子、次に妹八田若郎女、次に女鳥王。又矢河枝比賣の弟、袁那辨郎女を娶して、生みませる御子、宇遲之若郎女。」(応神記・日本古典文学大系『古事記・祝詞』に拠る。以下、『日本書紀』の引用も、ともにこの叢書を利用する。)

古事記および日本書紀の中にも「宇治の族」がいる。そしてその構成員それぞれが興味深いドラマを持っている。自殺した兄、天皇のもとに嫁いたが後の嫉妬に苦しめられる妹八田若郎女。そして、もう一人の妹女鳥王は二人の男との関係から追い詰められ、駆け落ちをして殺される。この「宇治の族」の物語も悲劇の色合いがはなはだしく濃い。二つの「宇治の族」の物語が似ているとか、踏まえているとかの判断を下す前に、源氏物語の登場人物の系図と、記紀の登場人物の系図とを並置してみよう。

兄妹か父娘かの違いは確かにあるのだが、人数はぴったりとそろっている。男一人以外に他に男がまぎれこまず、女が三人ということでは完全に一



致する。そして女性たちの境遇もどうやら似通っているのである。

宇治の宮

源氏物語の八の宮の住居はどこにあったことになっているのだろうか。「河のこなたなれば、舟などもわづらはで、御馬にてなりけり」（橋姫）とあって、宇治川東北岸であったことは確かである。昔の地形が現在の地形とはかなり違ったものであったとしても、「あじろのけはひ近く、みみかしがましき川のわたりにて」（橋姫）、「きりわたれるさま、所がらのあはれおほくそひて、れいのしばつむ舟のかすかに行きかふ跡のしら波、めなれずもあるすまひのさまかなと」（総角）、「水の音なひなつかしからず、宇治ばしのいと物ふりて見えわたさるるなど、きりはれゆけば、いとどあらましき岸のわたりを」（同）といった文章から、すぐ川岸にあったことがわかる。しかし、それも宇治を歩いたことのある人にはすぐわかるように、当り前のことなのである。宇治は宇治山なのであって、東北岸はすぐに仏徳山、朝日山への登りとなる。屋敷を営めるような地域はごく限定されているのである。

匂の宮が長谷に詣でて、帰りには当然、薫から話に聞いていた「宇治の中宿り」、美しい姉妹のいる八の宮のもとを訪れるつもりであったのが、貴公

子の不幸というのか、京都からの迎えが多勢やって来て、残念にも対岸の別荘に禁足されてしまうという場面がある。「たゞ、さしわたる程なれば、追風に吹きくるひびきを、聞き給ふに」(椎本)とあって、対岸で演奏される賑やかな管絃の音色が川面を渡って淋しい八の宮の住居にも伝わって来る。その対岸の屋敷というのは、「六條の院より伝はりて、右の大殿知り給ふ所は、河よりをちにいと広く面白くてあるに、御設せさせ給へり」とあって、これは源融…雅信一藤原道長と伝領され、その息子の頼道によって平等院となった宇治別業がモデルであると考えられている。実はそれほどしつこい考証をする必要などなかった。慎重を期してみたのだが、八の宮およびその姫君たちの住居は平等院の対岸が想定され、するとそれは現在の宇治神社、宇治上神社あたりでなくてはならない。『山城国風土記』逸文に「桐原日桁宮」とされている宇治稚郎子の宮居である。筆者にとって宇治は親しみ深い土地で、数え切れぬほどこの付近を歩き回ってみたが、まずこの結論は動かないように思われる。というのも、繰り返すが、平等院側と違って、こちらはすぐに山だから、それほど土地に余裕があるわけではないのである。そうして、正確に認識して置こう。多くの国文学研究者の虚を衝くことになるかもしれないが、平安時代にすでにそこが神社であったとすれば、厳密には、そこは決して生きている人びとが住み、生活を営む場所ではありえなかったはずである。紫式部は神をも恐れぬ何とも恐ろしい魂胆の持ち主だということしかない。

この宇治神社、宇治上神社は、たとえば先の『都名所図会』には「離宮八幡宮」という名で登録されている。その説明文を引いてみよう。

「離宮八幡宮は橋寺の南にあり。祭神は三座にして、上の社は応神天皇、仁徳天皇、下の社は兎道の尊を崇奉る。是平等院の鎮守也。宇治郷の産砂神とす。神輿三基、例祭五月八日。

杖(またぶり)社は当社の北にあり。離宮の摂社なり。離宮と号することは、此地に宇治宮ありしゆへ、自然の称号也。又一説には、当社の神は民部卿平忠文が

霊を祭るともいへり。則此地忠文が別荘にて、朱雀院の御宇承平三年三月平将門征伐のとき、秀郷、貞盛、忠文等、將軍として、ことゆへなく将門を退治せしにより、勅賞のさたありけるに、小野宮左大臣清慎公うたがはしきを行はずと申されければ、九條右大臣実頼公宣ふやうは、^{つゝ}刑のうたがはしきをば行はず、賞のうたがはしきをば行へとこそ承り候へと申されけれども、遂に忠文公には其沙汰なかりけり。忠文本意なき事に思ひ、手を握りて立たりけるが、八つの爪手の甲まで通りて、血は紅をしぼり、断食して死けり。其まま悪霊となり、さまざま祟をなしければ、小野の家は絶にけり。かくて此霊を宥んため、神にいはひて、宇治離宮明神と崇め、後冷泉院の御宇治暦三年十月七日正三位をさつけ給へり。」(新修京都叢書第六卷『都名所図会』より)

承平の乱の、将門討伐にあたって、功を挙げたにもかかわらず、恩賞を思ったほどにももらえずに憤死した人間が祟り神となって、その霊を宥めるために神として祭ったという話は興味をそそらないわけではない。しかし、この神社の由緒はさらに古いものと思われる。『延喜式』の第九、十卷、俗にいう「神名帳」は、延喜という時点で見落としてはならない全国の神々を網羅しているものと考えられるが、その中に「宇治神社二座^鑿」と記されているのが、この宇治神社、宇治上神社だと思われるからである。この『延喜式』の記載を信じれば、この二社は、毎年二月の祈年祭(としごいのまつり)に際して、鍬一口、靱一口が朝廷から贈られる六十五座の中に加えられていたことになる。

しかし、この神社の問題は難しい。何故、境界を接して、宇治、宇治上の二つの神社があるのかがよくわからないし、神名帳は二座としているが、先の『都名所図会』によれば、宇治上が応神、仁徳の二座、宇治が宇治稚郎子的一座であった。しかし、現在宇治上神社は宇治稚郎子と応神・仁徳の三座を祭っていて、現に神殿も三つあり、宇治神社も宇治稚郎子を祭っている。祭神については実にさまざまな憶説がなされて来た。たとえば中世の人である隆源の『醍醐雜抄』は、宇治神社の祭神は、応神天皇と争って破れ、屍体が琵琶湖の瀬田から宇治に流れついたという忍熊王だとしている。

しかし、宇治上神社はやはり三座を祭っていて、『都名所図会』の応神、仁徳二座説はおかしい。この宇治上神社の拝殿は鎌倉時代、本殿は平安時代、神社建築としては現存する最古のものであって、建築史の上でも重要視されている。絶破風すがるはふといわれる技法を用いた拝殿の軒は緩やかに反りつつも引き締まった均衡を保って美しく、本殿はそれぞれが独立して並んでいる三つの神殿を横に長い一つの覆屋で覆うという奇抜な形式を持っている。この日本最古の神社建築は繊細でかつ華車である。三つの神殿の祭神は向って左から、宇治稚郎子、応神、仁徳の両天皇とされている。左右の神殿の扉の裏側には神像、すなわち宇治稚郎子と仁徳天皇の肖像が描かれている。仁徳像は衣冠束帯姿——平安時代の服装をしているのが何とも微笑ましいが——、宇治稚郎子は総角姿の童子像である。

宇治神社の現在の神殿は新しい。しかし、かつて宇治神社の遺構であったという建物が、さらに上流の、山の中の部落である宇治白河の白山神社の拝殿になっている。茅葺の簡素な作りで、やはり古く鎌倉時代のものという。宇治神社の方は宇治稚郎子の宮居の跡と考えられている。しかし、宇治神社、宇治上神社の両社とも近接していて、天皇になろうかという親王の宮居は両社を含む面積のものだったと考えるのが自然であろう。『山城国風土記』逸文を引いてみよう。

「山城の國の風土記に曰はく、宇治と謂ふは、輕島の豐明の宮に御宇しめしし天皇のみ子、宇治稚郎子、桐原の日柝の宮を造りて、宮室と爲したまひき。御名に因りて宇治と號く。本の名は許の國と曰ひき。」(日本古典文学大系『風土記』)

この逸文は『詞林采葉抄』の中のものであり、万葉集卷一・七の歌の注釈のために引用されたものである。

額田王の歌未だ詳らかならず

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の京の假廬し思ほゆ

右、山上憶良大夫の類聚歌林を検ふるに曰はく、一書に戊申の年比良の

宮に幸すときの大御歌といへり。たゞし、紀に曰はく、五年春正月己卯の朔の辛巳、天皇、紀の温湯より至ります。三月戊寅の朔、天皇吉野の宮に幸して肆^{とよのあかりきこしめ}宴す。庚辰の日、天皇近江の平の浦に幸といへり。

この歌の作者は額田王か齊明天皇か未詳、額田王の歌であるとしても、齊明天皇の行幸に従駕した当時のことを思い出して作ったものということになるだろう。齊明天皇と額田王の関係は、例の「熟田津」の歌でも問題となってくるが、この左注はまた、その行幸が大化四年（648）と齊明五年（659）にあったことを指摘している。ただ齊明五年春正月の行幸を思い出して秋の歌を作るというのはおかしいから、齊明五年にやはり宇治を通り過ぎて、大化四年秋の行幸を思い浮かべて、この歌は作られたのだというのが左注の主張なのだろう。ともあれ、由阿が『詞林采葉抄』でわざわざ風土記逸文を引用したのは、何故「宇治の都」という表現が可能だったかを説明するためであった。それは宇治稚郎子の桐原の日桁の宮があり、宇治は都だったからであるというとも簡単な結論がここで得られた。万葉の歌人にとって、宇治は都と意識されていたのである。

もう一首、万葉集の中から、この宮に関する歌を挙げよう。人麿歌集中のものであって、柿本人麿その人の作品である可能性が強い。

宇治若郎子の宮所の歌一首

妹らがり今木の嶺に茂り立つ嬌松の木は古人見けむ（巻9・1795）

この歌の「今木の嶺」について、それが宇治、宇治上両神社の背後の山陵部を指すのか、大和の高市郡、かつて今來郡と呼ばれた地域のある山を指すのか、二つの説がある。そういうことを言い出したのは契沖であり、さらにはっきりと今來が大和だとしたのは本居宣長である。

「今木ノ嶺疑はし、（若シくは、宇治ノ宮の外に、今木にも宮ありしにや、今木と云處は、欽明紀に、倭ノ國今來ノ郡と見え、皇極記、齊明紀、孝徳紀、などに見えたるも倭なり、萬葉十に、^{イマキノノカ}今城岳とあるも、倭と聞えたり。又續紀卅七に、田村ノ後宮、今木ノ大神とある田村は、奈良にあり、

然るに、山城志に、今來ノ嶺は在リ宇治ノ彼方町ノ東南ニ、今日ヲ離宮山トと云るは、此ノ萬葉ノ歌に依テのおしあて説なるべし、姓氏録に、山城ノ國に今木ノ連、又今木など云姓はあれども、宇治のあたりに、此ノ地名古書に見えたることなし、さてかの今木ノ大神と申すは、後に平野に遷し奉り賜へり、或人ノ云、平野の今木ノ神を、世に仁徳天皇なりと申しならはして、家隆卿の哥などに、難波津に冬隠りせし花なれや、平野の松にかかる白木綿、ともあれど、誤なるべし、萬葉九の哥によれば、宇治ノ若郎子なるべし、と云るは、さもあるべきことなり」(「古事記伝三十三」本居宣長全集第十一卷)

宇治稚郎子は宇治以外に、大和にも宮を持っていたというのだが、あながちその可能性がないわけではないにしても、記紀はいっさいそのことに触れていない。他の資料、あるいは口碑の類にでもそのことを示唆するものがあれば別だが、やはり「今木の嶺」は宇治、宇治上両社の背後の山と考えてさしつかえないのではないだろうか。甲類・乙類の仮名遣いの神話は現在ゆるやかに崩れかけている観があるが、「今木」が「今來」の意味であるとすれば、特に渡来人との接触が考えられる宇治稚郎子ゆかりの宇治に、この地名が残っていたとしても不自然ではないだろう。それゆえ今木=大和という宣長説は取れないけれども、宣長が京都の平野神社の今木神を宇治稚郎子であるかもしれないとしたのは面白い。普通、この今木神は宇治稚郎子の妹の女鳥王をめぐって恋の鞘当てを演じた仁徳天皇か、その弟の速総別王とされる(『二十二社本縁』)。

「今木の嶺」の歌はあくまでも挽歌に位置づけられている。とすると、その間に二三百年の時が流れているが、宇治稚郎子に対して捧げられたものと考えるべきであろう。宇治稚郎子は死後、「菟道ノ山ノ上に葬りまつる」(仁徳即位前記)とあることからすると、「今木の嶺に茂り立つ孀松の木」は宇治稚郎子その人の象徴とも受け取れる。

『山城名跡巡行志』(宣長がいう『山城志』はこの書物だと思われる)は宣長がい

うほどには杜撰なものではないようだし、桃山時代のものと思われる県神社蔵の古地図も、現在の朝日山を「今来嶺 稚郎宇治墓」としている。しかしいま、生前の宮居と死後の墓とを混同しながら話し始めている。墓については次の章で述べよう。宇治の宮には、さらに感銘的な事実がある。宇治上神社の宮司は現在宮村家であり、この家も古いらしいのだが、宇治神社の方は、明治中期まで、宇治稚郎子の母親である宮主矢河枝比賣につながるという宮主氏、中世には「宇治長者」として記録に現れる宇治氏に名を変え、茶を生産するようになってからは「長者」を「長茶」——チョウサと読んで音は変わらない——に変えて、一つの家が延々と宮司を務めて来たというのである。

宇治稚郎子の墓

さて、生前の宮居から、今度は死後の墓陵を問題にしよう。宇治には二カ所、宇治稚郎子のものとされる墓がある。京阪電車の三室戸駅近く、以前は蓆で覆われていた茶畑もすっかり破壊され、いまは住宅にぎっしりと囲まれた中に、樹々が鬱蒼と生い茂ったかなり大きな前方後円墳がある。この丸山古墳が現在宇治稚郎子の墓として宮内庁に管理されていて、各種地図もそれに従っている。しかし、宇治にある最大の、築造された墳墓であるという以外に、宮内庁の比定に根拠があるわけではないようである。

ここで切り札を出すことにしよう。単に宇治稚郎子の墓に関する切り札ではなく、ここまで筆者が宇治について、あるいは宇治稚郎子について、自ら歯痒く感じながらも、たどたどしい作文を綴って来させる原因となった、ごく短い、わずかに四十字の記事なのである。『延喜式』第二十一卷諸陵寮に次のように記されている。

「宇治墓 菟道稚郎子皇子。在山城国宇治郡。兆域東西十二町。南北十二町。守戸三畑。」

この記事に筆者の眼は釘づけになったまま、しばらく動かなかった。兆域があまりに広大なのである。この時代の天皇陵の被葬者の比定はまず信用できないという考古学の常識がある。それを承知しつつ、単に『延喜式』の記載のみを問題にすると、宇治稚郎子の父である応神天皇の恵我藻伏崗陵は「兆域東西五町。南北五町」とあり、兄の仁徳天皇の百舌鳥耳原中陵は「兆域東西八町。南北八町」とある。この二つの記載は現実に応神陵、仁徳陵の前に立って、まず納得のいくものであるが、これら世界でも最大規模の墳墓より数倍も宇治稚郎子の墓——天皇のものだけ陵と呼ぶことにしよう——は巨大だということになる。『延喜式』は平安時代の公式の規定である。律令で定められた事がらのさらに施行細則とってよい性格を持っている。だから、これは決してあだや疎かにできる類の記載ではない。境界は垣や溝で守られ、人びとの立ち入りは固く禁止されていたと見なくてはならない。「名例律」の八虐、つまり国家に対する大罪である八つの罪の中のひとつ謀大逆は、「山陵及び宮闕を毀たむと謀る」であり、陵墓への侵入を内容としている。現在でも天皇陵へ侵入したら皇宮警察に逮捕されるのだと思うが、禁忌の観念がさらに強かった古代にあっては、陵墓への侵入はいっそう厳しく禁じられていたはずである。世の中の秩序が乱れ、今まで強固だった価値観が揺れ動く時代、たとえば鎌倉時代に盛んに盗掘され、戦国時代に石郭の石が城の石垣に使われるということがあったとしても、かつて人びとは墓に対して畏怖を持ち、敬虔に対していたことと思われる。いずれにしろ、『延喜式』諸陵寮に記載される陵墓は無名の墓ではなく、由緒この上なく正しい陵墓なのである。

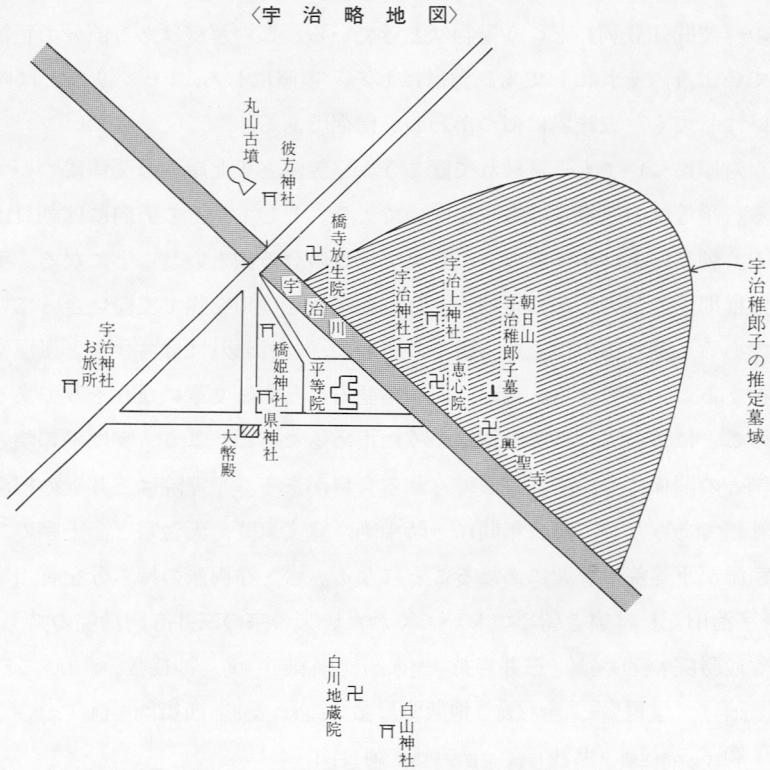
丸山古墳は方十二町には勿論満たない。兆域は盛土の部分のみを指すのではないかもしれないが、丸山古墳を中心に方十二町を地割りすることもまず不可能である。それは宇治の平野部全域を占めることになってしまう。

もう一カ所、宇治稚郎子の墓とされている場所がある。先ほど述べた「今来の嶺」、朝日山の頂上である。興聖寺の脇を通して山径を登る。興聖寺は

道元の草創，宋に渡って如浄の会下に参禅，その印可を受けて帰国した道元初開の禅苑という由緒を持つ。しかし，もともと深草にあったのを，江戸時代，家康・秀忠・家光の三代に仕えた淀城主永井尚政が自らの菩提寺として現在の地に再興したものである。川岸から横へ折れ，木洩れ陽の中を，かなり長い小径を歩いて行くと，禅寺らしく簡素で清潔，さわやかな景観を持った寺院に突き当る。そこを右へ回って，寺の裏山に登るのである。宇治稚郎子の墓域を侵したために，その靈威によって，この寺はしばしば怪火に見舞われたと伝えられる。ものの十分ほどで山頂に到着する。そこには観音菩薩を祭る堂があって，その横に「菟道稚郎子之墓」と書いた墓碑が立っている。そこから少し距離を置いて石塔があって，永井尚政が建てたものようだが，字は磨滅していて読めない。ともあれ，この山頂を方十二町，メートル法に換算して170ヘクタール余の広大な面積の地域が宇治稚郎子の墓域なのだと思われる。平等院から正面に見える宇治川東北岸の山陵部全域が宇治稚郎子の墓なのだと思えるしかない。『延喜式』には方十町を越える陵墓が他にいくつかある。天智天皇の山科陵が「兆域東西十四町，南北十四町」となっていて，藤原宮子の佐保山西陵が「東西十二町，南北十二町」となっている。さらに宮子の父である不比等の多武岑墓も「東西十二町，南北十二町」となっている。仁徳・応神陵以上の人工建造物は考えられないのだから，すべて自然の丘陵を墓域としているのである。山科の御陵みきさきに天智陵はあるが，やはり北の方に広がる丘陵を墓域としていたと思われ，宮子の陵は，佐保山，現在ドリーム・ランドになっている一帯だったのだろう。不比等の墓の兆域は多武岑そのものだったのだと思われる。

日本書紀の「菟道の山の上に葬りまつる」という言葉通りに，朝日山に宇治稚郎子は葬られ，その山陵部全体が墓域とされていたと考えられる。宇治，宇治上の両社は宇治墓の兆域に接する形で，あるいは兆域の中に建てられているのだと思われる。逆の言い方をすれば墓域は両社の境内だともいえる。先ほど，平安時代神社であったとすれば，そこは人間の住むところでは

なかったはずだと述べた。ここでさらにダメを押すことになる。『源氏物語』宇治十帖の舞台，そこは墓場だから生きた人間の住むところではなかったのである。



朝日山

宇治はその名を冠した宇治稚郎子を抜きにして語ることはできない。紫式部が源氏物語の舞台として選んだ東北岸一帯が彼の故地であった。死者の想い出の世界であって、人びとの生活する場所ではなかったのである。現在で

も寺社以外に人家は少いのだが、興聖寺は先に述べたような因縁があり、恵信僧都源信とゆかりの深い恵信院にしても、またわが国で始めて火葬になった宇治橋建設者、元興寺の僧道照（あるいは道登が建設者だとする説がある）ゆかりの橋寺放生院にしても、すべて離宮社の神宮寺とする解釈を、県神社所蔵の『波間知登利』という書物はとっている。この解釈はある部分で正鶴を射ていよう。それにしても、源信にしる、道照にしる、「ヒジリ」とは呼べないにしても、三昧場に似つかわしい僧侶である。

対岸についても一言触れて置こう。平等院と東北岸との関係についてである。平等院の鳳凰堂は真東を向いている。そして、その方向には朝日山がある。朝日山とは平等院の方から見て朝日の登る山ということになる。実は宇治稚郎子の墓碑とあの定朝の阿弥陀如来像とは川を隔てて向い合っているのである。朝日山の頂上から眼下の正面に、われわれははっきりと鳳凰堂を見据えることができる。だが、何やら語るに落ちる文章になりそうである。このことについては事実の指摘のみに止めることにしよう。実は平等院と東北岸との関係について証言してくれる資料がある。平等院は三井寺の円満院の管轄であったが、慶長年間に一時中絶、寛文以降、天台宗と浄土宗の二つの宗派が平等院の管理にあたることになる。台・浄両派の持ち分を皆川家蔵の『宇治旧記』は書き留めておいてくれた。天台宗の三井寺円満院の持ち分は、

最勝院 平等院 天台宗 三井寺持 境内五十間六十間四尺平均 神棧敷二間一間 公文所八間四方 堂屋敷二十三間九間 地藏堂屋敷二十五間七間半 西御廟二十間十二間半 東御廟二十五間五間 県社九十一間百四十間 朝日山

とある。地藏堂屋敷というのは、先ほど触れた白河の地藏院を指しているのだと思われる。当然といえば当然だが、神事に関わるものは江戸時代からの浄土宗ではなく、すべて古くからの天台宗の管理に留められたようである。神棧敷というのはお旅所のことかとも思ったが、その大きさ（小ささ）からいって、県神社の前にある、離宮祭の大幣を置く大幣殿であろう。県神社については後に述べるとして、西御廟、東御廟とされているのは、宇治神社、

および宇治上神社のことだと思われる。そして、朝日山までが三井寺の持ち分とされていることが何よりも注目される。

『延喜式』の成立した時点では、朝日山すなわち宇治墓は律令格式の規定通りに、毎年二月には巡検使がやって来て破損状態が調査され、十二月には朝廷からの使いが五色帛、庸布、倭文、木綿、麻を奉幣したのであったろう。だが、ごく早い時期に諸陵寮の管理は廃れたのかもしれない。何分藤原氏ゆかりの平等院のことだから、朝日山はその持ち分とも意識されるようになる。中世、朝日山は茶の名園となるが、これは管理が廃れた後に墓守、あるいは離宮社の社家の人びとが兆域を茶園にしてしまったのである。かつて、現在の簡単な墓碑とは違って、九重の石塔が朝日山の山頂にはあったと『波間知登利』は伝えている。その山麓の一部が興聖寺境内になったことについて、先に不審火について触れたが、この書物は「今為^ル他境ト、痛哉歎哉」と述べる。兆域の観念だけは江戸時代になっても根強く生き残っていたのである。三井寺円満院、あるいは平等院がそこを管理していたとすれば、何等かの供養は行われ続けたはずである。山号を朝日山とする平等院の持つ王朝の美が微妙に変質し、限りなく奥行きを深いものにして行く。しかし、さらに一步踏み込むには、資料が不足しているようである。

稿を改めて、古事記・日本書紀に描かれる宇治稚郎子、そしてその不幸な姉妹たちの物語をたどっていくことにしよう。その際、『三国遺事』や『三国史記』、現在の韓国の歴史学の集大成であると思われる『韓国史大系』、東アジアで唯一の科学的歴史書を標榜する北朝鮮の『^{チヨソンチヨンサ}조선전사(朝鮮全史)』をも参考とすることにしよう。宇治稚郎子は百済からの渡来人に日本で始めて漢籍を学んだという国際的知識人のはしりのような人である。そうして、タヂマモリの殉死を除けば、記録の上で意的に自殺した最初の人であるというのも、近代の知識人の宿命と似通っていて、興味を唆る。日本の後進性と海外の先進性と、その状況の確認のためにも朝鮮半島の歴史を知る必要があらう。

最後に藤原伊周の漢詩一首を挙げて解釈してみることにする。伊周は周知のように、叔父の道長らに失脚させられ、大宰権帥となって九州にまで降った人である。その宿敵の道長に宇治別業に招待されたものではないと思うが、いつの作かよくわからないが、宇治逍遙の漢詩一首を『本朝麗藻』に残しているのである。

諸ノ文友ト船ヲ宇治川に泛ブ。聊以テ逍遙ス。

篋ベツセン笠アシノイホリト蘆 蘆アリ宇治川、

泛然トシテ古ノ神仙ヲ相憶フ。

清談緩カニ發シテ盃ヲ初メテメダラ迎ス。

緩カニウマノリ騎テ遅ク來ッテ掉未ダ前ニセズ。

模嶺ノ晚雲紅クシテ慘澹タリ。

落灣ノ秋水白クシテ潺湲タリ。

林ノ南ノ柳樹ハ將軍ノ宅、

橋ノ北ノ稻花ハ帝王ノ田。

波勢湯湯タリ巴峽ノ路、

風聲颯々タリ洞庭ノ天。

山河ノ奇絶ヲ詩人記シ、

土地ノ苞茅ヲ里老傳フ。

朝位共ニ鸞鳳ノ闕ヲ趁ル。

野ニ遊ビ魚ヲ釣ル船ニ同宿ス。

壽夭ニシテ泰ラカナルヲ否ムハ吾が意ニ非ズ。

唯莊周ノ第一篇ヲ誦ス。

(日本古典全集八所収の『本朝麗藻』により、訓み下しは筆者)

『御道関白記』に道長が十数度宇治を訪れた記事が見える。長保元年、数人の文人が随行し、道長の詩に和して作詩をした。大江以言の序が『本朝文粹』に採られ、道長以下四人の作品が『本朝麗藻』に採られている。伊周の

作品はそれらとは一線を画している。華やいだ雰囲気も、道長への阿諛追従もなく、むしろ沈んでいる。「林ノ南ノ柳樹ハ將軍ノ宅」というのは先の平忠文の屋敷、「深草の西岸」とあって、左岸にあったようである。「橋ノ北ノ稻花ハ帝王ノ田」には「宇治院臺榭已毀。只有點田」と注釈がある。宇治稚郎子の宮も現在は跡形なく、ただ稲田のみが残っているということになるが、しかし、興味深いことに、この帝王田は神田として、江戸時代中期までは残っていたようである。一度失脚し、挫折を経験した人間は廃墟への眼差しを持つようになる。伊周は平忠文と宇治稚郎子について、道長およびその同行者とは違って、同情の心を失わない。「朝位共ニ鸞鳳ノ闕ニ趁ル」は、当然宇治稚郎子と仁徳天皇とが宇治と大阪の間で互いに皇位を譲り合ったという故事を指し、「壽夭ニシテ泰ラカナルヲ否ム」というのは、宇治稚郎子の夭折、自殺を指しているであろう。伊周という人は、『枕草子』での得意の時代のさっそうとした振舞い、『栄華物語』の配所、正確には左遷の地へなかなか赴こうとせず、母親と手を握り合って泣いている、また母親に会うために隠れて上京するといったほとほと情ない姿などが印象に残っていただけなのだが、この詩はたいへん味わい深い。最後の一句、伊周が誦するという『荘子』の第一篇「逍遙遊」の一節を引いて、稿を改めることにする。天下を譲ろうという堯の申し込みを辞退した許由に、宇治稚郎子、そして伊周自身が投影されることになる。

「堯、天下を許由に譲らんとす。曰く、日月出でぬ。而るに燭火息まず。其の光に於けるや、亦難からずや。時雨降りぬ。而るに猶ほ浸灌す。其の澤に於けるや、亦勞せずや。夫子立ちて天下治まるに、我猶ほ之を戸^{つかきど}る。吾自ら視るに缺然たり。請ふ天下を致さん、と。許由曰く、子天下を治め、天下既已に治まる。而るに我猶ほ子に代らば、吾將に名を爲さんとするか。名は實の賓なり。吾將に賓と爲らんとするか、鷦鷯深林に巢ふも、一枝に過ぎず。偃鼠河に飲むも、満腹に過ぎず。歸休せよ君。予天下を用て爲す所無し。庖人庖を治めずと雖も、尸祝は樽俎を越て之に代ら

じ，と」(新釈漢文大系7『老子・荘子上』による。)

そう言い残して，許由は耳が汚れたとあって，川で耳を洗ったのだった。

[この稿続く]

〔付記〕この稿を成すに当って、『宇治市史』全七巻にはたいへんお世話になった。また、『宇治旧記』、『波間知登利』など，県神社宮司奥村郁三先生に，貴重な資料を借覧させていただいた。謝意を表して置きます。